

## 〈集談会報告〉

## リスクマネジメント部会の活動と意識の変化

長谷川 雅子 鈴木 光江 野田 和子

## 要旨

13年度、当院は杏林大学の川村治子先生の「医療のリスクマネジメント (RM) の構築に関する研究」のフィールドとして1年間直接指導をいただいた。RM 部会では、4つのワーキンググループを立ち上げ活動を行った。また多くの医療職と学習を共有することで質の向上を図りたいと思い、計5回の講演会を開催した。

それらをとおり、全職員のリスクに対する意識がどのように変化したかを知るためにアンケートを実施し、まとめた。昨年度とのデータの比較は出来ないが、病院全体でのリスクに関する意識は高くなっていると評価できた。

今回の結果を、今後のRM部会の活動に生かしたい。

## はじめに

当院では今年度、杏林大学の川村治子教授から、直接ご指導をいただくという好機に恵まれた。ご存知のとおり、川村先生は平成11年から始められた「医療のリスクマネジメントの構築に関する研究」というテーマで研究を続けてこれら3年目になる。今年度が最後の年になり、現場での実践を展開する場所として、当院がフィールドの一つとして選ばれた。川村先生の当院でのねらいは、専任のリスクマネージャーのいない病院におけるリスクマネジメントの構築にあった認識している。

ちなみにもう一つのフィールドの病院は、鳥取市民病院である。こちらは今年度から専任のリスクマネージャーを配置し、その指導育成をとおりリスクマネジメントの構築をするというものであると伺っている。

ともあれ1年間、川村先生のご指導を受けながらリスクの勉強が出来るということで、病院全体でそれに取り組むという方針が出され、田中・横山 両先生をリーダーにリスクマネジメント部会の活動が開始された。

今回は、川村先生を中心とした主な部会の活動についてと、全職員のリスクに対する意識の変化を知るために実施したアンケートの結果がまとまったのでここに報告し、次年度の活動につなげていきたいと考えている。

## リスクマネジメント部会の主な活動

## 1. 4つのワーキンググループの結成と活動

当がんセンターにおいて、特に起してはならない

重大なリスクである化学療法について医師部門・看護部門・薬剤部門が共同で検討するワーキンググループが結成された。ワーキンググループは必要に応じて随時関係部門が参加する形にした。さらに医療機器のリスクの一つである輸液ポンプについても麻酔科医師を中心に実際に器械を使用する機会の多い看護部とて検討するワーキンググループができた。さらに看護部独自で、看護部門から出される事例の2/3を占めるといわれる転倒・転落と誤薬のワーキンググループを立ち上げ、計4つのワーキンググループが発足した。それぞれのワーキンググループは、月1回1～2時間の直接指導を受けながら活動を続けてきた。それらの活動をとおり部門間の協力体制が強化され、様々なニアミスの対応もスムーズになってきたと感じている。なお、活動結果については、グループ毎に成果の発表をする。

## 2. 講演会の開催

リスクマネジメントにおいて教育がいかに大切であるかについては異論のないところであろう。その意味においても、この機会をリスク委員のみならず、多くの医療職と共有することで質の向上を図りたいと思い、計5回の講演会を開催した。

## アンケート結果と考察

続いて、アンケート結果について、若干の考察を加えながら報告する。

アンケートは意識の変化を中心にして、部会独自でアンケート用紙を作成し、全職員を対象に質問紙法で行った。

配布数 574枚

回収数 513枚  
回収率 89.4%

- 1) 年代別にみると、20代がやや少ないが、30代から50代まではほぼ同じ割合で偏りはなかった(図1)。
- 2) 所属別の割合は、図2のとおりで、医師が14%、看護部では61%、次いで検査部、栄養課、薬剤部、放射線部、管理部と続いている(図2)。
- 3) RM 部会委員の占める割合は全体の7%だった(図3)。
- 4) 次に「川村先生の講演会への参加や、勉強会で指導を受けたことがありますか」の問いに対して「ある」と答えた人が全体の32%、「ない」と答

た人が全体の67%であった(図4)。

- 5) 講演会や勉強会に出席をした経験を持つ人に対して、その意義についてたずねたところ、「とてもあった」・「少しあった」と答えた人が全体の95%を占めていて、非常に良い影響があったことがわかる(図5)。
- 6) 講演会等の参加状況を部署別に見てみると、薬剤部、検査部がいずれも58%と高く、次ぎに医師が38%と続き、看護部は33%であった(図6)。看護部については独自のリスクの勉強会を設けて

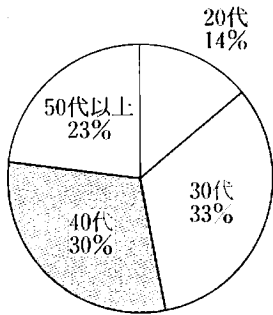


図1 年代

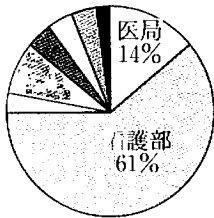


図2 所属別の割合

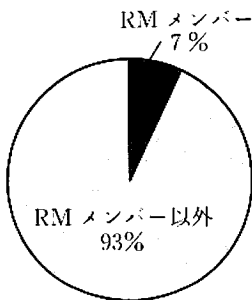


図3 RM 部会委員の割合

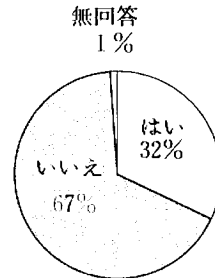


図4 講演会等の参加経験の有無

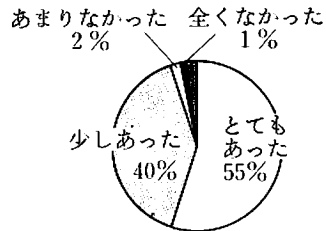


図5 講演会等は意義あったか

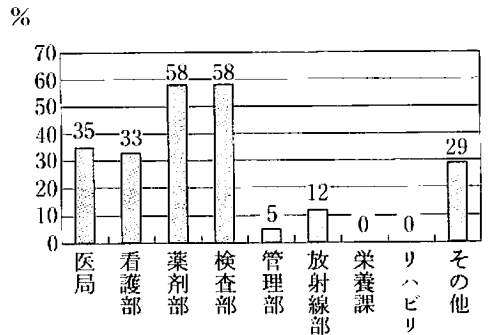


図6 講演会参加者の部署別割合

頂いたり、講演会も看護部対象のものを多く企画させていただいたが、出席者が看護部全体の半数にも満たなかったのは、非常に残念に思われる。3交替という勤務体制も影響していると思われるが、1人1人の意識の表れであると同時に、企画やPRという点において検討の余地があったと考えている。

- 7) 次に『この1年間でリスクに対する意識の変化がありましたか』の問いに対してとても「あった」が37%、「少しあった」が48%、「あまりなかった」が4%、「全く変わらない」が2%であった(図7)。
- 8) 『この1年間でニアミス報告書を書いたことがありますか』の問いに対して、「ある」60%「ない」

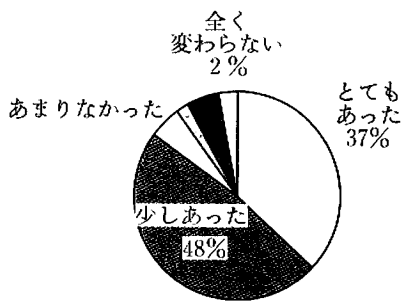


図7 リスクに対する意識の変化あったか

39%であった。

- 9) また『ニアミスが起きてしまった時、ニアミス報告書を書いていますか』の問いに対しては、「必ず書くようにしている」52%、「ほとんど書いている」28%で全体の80%を占めているが、「あまり書かない」4%、「全く書かない」3%で、無回答は13%であった。(図8-1・図8-2)

「あまり書かない」「全く書かない」と答えた人を部署別に見ると栄養課が24%、医師と放射線部それぞれが19%、管理部の16%であった。今後の課題のひとつであるとしてとらえている。

- 10) 次に『ニアミス報告書を書くときの気持ちを一つ上げるとすればどれですか』の問いに対して、「事故防止に繋げたい」が62%、「罪悪感・罪の意識」23%、「何か言われそうでいや」5%、「上司からの評価につながるか不安」1%であった(図9-1)。

- 11) 『ニアミス報告書記入に対する負担感は昨年に比べてどうですか』の問いに対しては「重くなった」が23%あり、軽くなったの約2倍だった。リスクマネジメント部会では今年度ニアミス報告書を、よりデータが集めやすく、書きやすくする為に幾つかの項目について改正した。共通のデータベース的な項目はチェック方式としたり、無記名としたりしたので、報告書記入に対する負担感

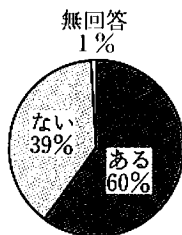


図8-1 1年間でニアミス報告書を書いたことがあるか

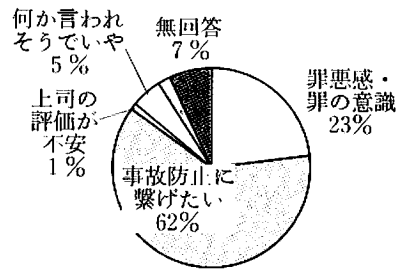


図9-1 ニアミス報告書を書くときの気持ちは?

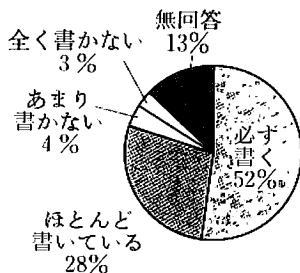


図8-2 ニアミスが起こった時、報告書を書きますか

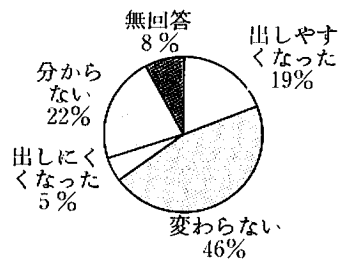


図9-2 ニアミス報告書は出しやすくなったか

は軽くなるのではと考えていたが、結果は負担感が増えているというものであった。ニアミス報告書を書くということは、ただ用紙を替えれば書き易くなるというものではなく、ニアミス起したそのことに対する負担感が大きく影響しているものと考えられる。

- 12) 『ニアミス報告書提出について、昨年と比べてどうですか』の問いに対して、「変わらない」が約半数の46%で、出しやすくなったが19%であった。しかし5%の人は出しにくくなったと答えている。(図9-2)
- 13) 次に『リスクに対する関心度は、昨年に比べてどうですか』の問いに対して、「非常に高くなった」の35%と「少し高くなった」の50%を合わせると85%の人が関心度が高くなったと答えている。(図10)
- 14) また、新聞やTV等リスク報道に対する関心度も同様の結果であった。『昨年と比べてどうですか』の問いでは、非常に高くなったが51%で少し高くなったの34%をいれると、やはり85%の人が関心が高くなったと答えている。このことは世間の趨勢でもあり、当然の結果とも考えられる。
- 15) 最後に『確認行為実施について、昨年の気持ちと比べてどうですか』の問いに対して、全体の80%の人が、昨年より意識してきちんと行なうようにしていると答えている。

今回の結果については、前年度のデータがなく客観的な比較は出来なかった。しかし全体的に見てい

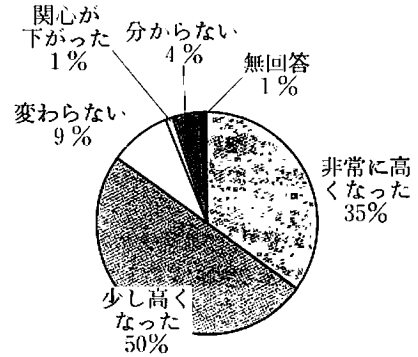


図10 リスクに関する関心度

くなかでは、まだまだ多くの問題を含みながらも病院全体でのリスクに関しての意識は高くなっていると評価したい。

川村先生は、結果を出すには5年くらいのスパンで見えていく必要があるといわれた。今後、川村先生という起爆剤であり刺激剤がなくなった中で、いかにリスクに対する意識を高め、維持していくか、我々に課せられた大きな課題になると考えている。

次年度は事故を起さない事を目標に、今年度、学習したことを現場で実践し、積み重ねていく年にしたいと思っている。

チーム医療を大切に、各部署間の一層の連携と協力が必要となろう。

今後とも全職員で事故防止に努めていきたい。